平成28年度教科リーダー養成・活用事業「研修成果報告書」

学校名	松江商業高校	氏　名	坪倉　将
教科等名	地歴公民（日本史）		
研修主題	生徒の興味・関心から出発する授業づくり		

１．本校生徒の実態と研究動機

本校生徒の卒業後の進路は、進学と就職が同じくらいの割合である。しかし、進学をする生徒にしても、受験科目として日本史Ａを必要とする生徒はほとんどいない。したがって、受験対策として細かな知識を注入することよりも、日本の近現代史のアウトラインをわかりやすく整理し、基礎・基本の定着を図ることや、歴史的な思考力や表現力を高めることが重要である。

近年来、生徒が主体的に学ぶ授業を目指して、２年前の教職経験１１年目研修を機に、ジグソー法などの導入を自分なりに行ってきた。しかし、そうしたいわゆるアクティブ・ラーニングも、基本的には教師側がテーマや課題を一方的に提示する形になりやすい。真の意味での「主体的」な学習は、生徒の興味関心や、問題意識から出発する授業なのではないか、と日ごろから思っていたことが、テーマ設定の理由である。

２．研修の方法

「生徒の興味・関心にもとづく授業づくり」を実践するにあたって、事前に生徒にアンケート調査を行った。

幕末期の学習を終え、明治時代の学習を目前に控えた１学期の終わりごろには、「中学校までの学習を振り返って、明治時代～昭和時代の日本について、疑問に思ったことは？」という問いかけを行った。そのなかでもっとも多かったのは、「なぜ日本はあんなに戦争ばかり行ったのか」という疑問であった。今回の研修を行う上で、上記の疑問は常に念頭に置き、日々の授業実践を行ったつもりである。さらに、２・３回目の研究授業には、上記の疑問をメインテーマにして授業を組み立てた。

また、日露戦争を学習課題にすえた１回目の研究授業を行う際には、教科書の該当ページを事前に通読させ、生徒から疑問を募った（別添資料１）。生徒から出た疑問のなかから、「なぜ日本は賠償金を取れなかったのだろう」を取り上げ、研究授業を行った。

３．考察

未習範囲のなかから生徒に疑問点を出させる、という試みは、今年度初めて行ったものであるが、生徒の授業中の反応や事後の感想等をみると、一定の手ごたえは得られたように思っている。

たとえば授業中に、「みんなの疑問に対する応答は」というフレーズが教師側から出るだけで、生徒の顔がパッと上がることがしばしばあった。また、事後の感想には、

・自分がわからなかったことや不思議に思っていたことを取り上げてもらえると、授業をしっかり聞こうと思えた

・授業を受けて、疑問が解決したのでスッキリした

というような感想を書く生徒もおり、より能動的・主体的に授業に取り組むことができたのではないかと考えられる。

また、すべての生徒の疑問に答えることはできないものの、あらかじめ生徒がどのような点がわからないのか、どのような点に興味を持っているのか、ということを踏まえて授業を組み立てることができることも、このやり方の長所であるように思った。教師側としては、当然「分かっているであろう」と思い込んでいたり、長年教えているうちに見落としてしまったりしていることに改めて気づかされる思いをしたことも多々あった。

一方で、課題としては、生徒から出る「疑問の質」という点が挙げられる。教師側としては、歴史的な思考力や表現力の向上が果たせるような疑問、単元を貫くような本質的な疑問を都合よく求めるのだが、必ずしもそれにかなうものが出てくるとは限らない。生徒が自らの知識レベルや生活体験にもとづきながら出してくる疑問の「みずみずしさ」と、教師側が取り組ませたい主題の深さとのバランスを取ることは、こうした授業の組み立て方にとっては非常に重要になることを、再確認したように思っている。

こうした課題の１つの克服方法として、私は疑問文の書き始めをあらかじめ提示し、とくに「『なぜ』という疑問は必ず出そう」と生徒に求めた。「〇〇とは何だろう」という知識・理解に関する疑問ばかりにならないようにするためである。その他にも、平素の授業から、「なぜ」や「何のために」といった発問を生徒に投げかけ、取り組ませることを積み重ねるなかで、次第に生徒からも単元の核心を突くような、かつ生徒らしい新しい視点からの疑問を持たせていくべきだと考える。

そして、忘れてはならないのは、生徒が疑問を出したことそのものを、しっかり評価してやることではないだろうか。私自身の当初の目的も、上述したとおり、より生徒が関心を持って主体的に授業に取り組めるように、ということであったが、そのことと同等か、それ以上に、生徒が歴史に対して問題意識を持てるようになることの価値は大きいのだということを、授業を行っていくうちに考えるようになった。しかし、その部分の評価に関しては今年度は不十分だったので、今後の課題の１つとしていきたい。

４．自己効力測定尺度調査について

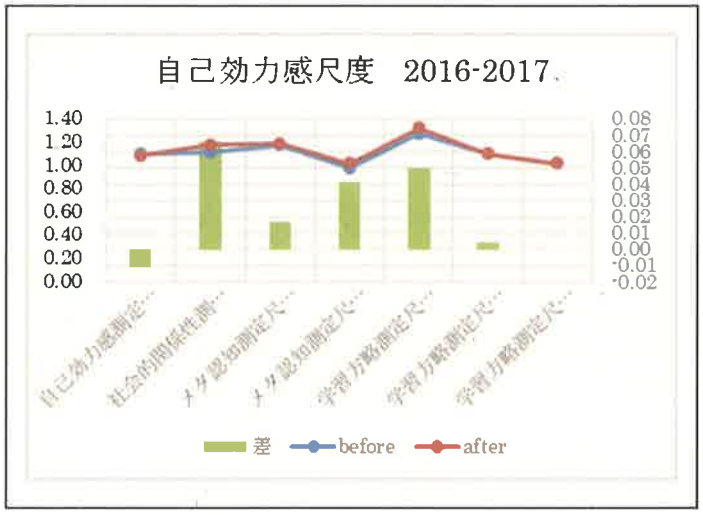
１回目を１学期の終わりごろ（７月）、２回目を年度末（３月初旬）に実施した（３ページ）。

１年を通して、ペア学習やグループ学習の形態をほぼ毎時間採用し、生徒同士のやり取りを増やしたつもりであるが、「社会的関係性測定尺度」がどのクラスも向上していることには、それが多少なりとも寄与しているのかもしれない。

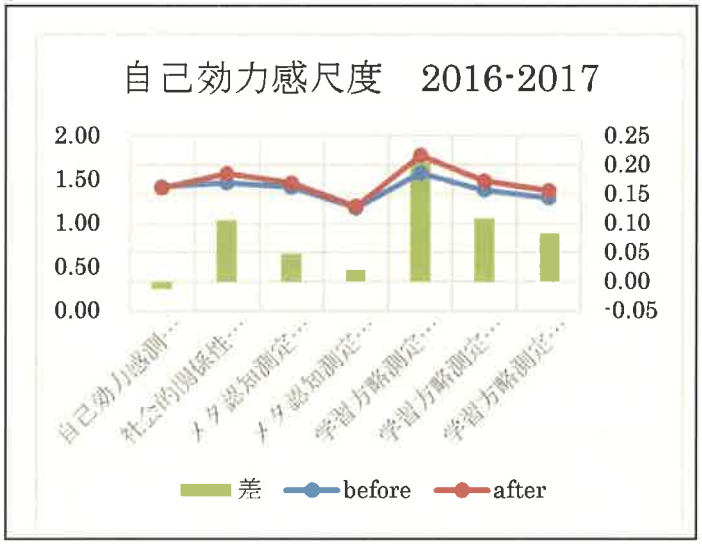
一方で、「自己効力感測定尺度」の向上は、思うようなものにはなっていない。質問項目からすると、生徒のなかに「テストでしっかり点が取れる」「そのためにしっかり努力できる」という実感がないと、おそらくこの尺度は伸びて来ないと考えられる。ということは、いわゆるＡＬ型の学習によって、他者と関わったり、思考したり、表現したりすることには一定の自信は持てても、それがテスト（成績）にも結び付いている、という実感を持てていないということになる。

そのあたりは、授業形態だけでなく、テストを含めた評価のあり方にも関わると思うが、ＡＬ型の授業であれ、一斉講義型の授業であれ、最終目標は生徒にしっかりとした「学力」を育成することである以上、私の実践には依然として課題が大きく残ったと言わざるを得ないと考える。

「２－あ」



「２－い」



「２－う」

参考文献

土屋武志・下山忍編著『学力を伸ばす日本史授業デザイン　思考力・判断力・表現力の育て方』（明治図書、2011）

峯明秀編『中学社会科“アクティブ・ラーニング発問”174』（学芸みらい社、2016）

資料1.

2-2　日露戦争に関する疑問一覧

1	なぜ	ロシアに宣戦布告したの（戦争をしたの）	だろう？	5
2		漢城を占領したの	だろう？	
3		清国と日本が戦ったの	だろう？	
4		ポーツマスで講和会議が開かれたの	だろう？	
5		中国はいろんな国に狙われるの	だろう？	
6		アメリカは見るだけだったの	だろう？	
7		ロシアでは国内の革命運動が激しくなったの	だろう？	
8		戦争が起こるようになったの	だろう？	2
9		戦争反対を唱えたの	だろう？	
10		ロシアとの交渉は成果を挙げられなかったの	だろう？	2
11		主戦論と非戦論があったのに戦争を開始したの	だろう？	2
12		ロシアと協調して利害を調整しようとしたの	だろう？	2
13		東京帝大の教授は強硬意見を唱えたの	だろう？	
14		ロシアと協調せず、イギリスと同盟を結ぶことを選んだの	だろう？	3
15		兵員や弾薬が不足したの	だろう？	
16		条約を結ぶときにアメリカが出てきたの	だろう？	
17		韓国にも勢力を伸ばしてきたの	だろう？	
18		日本海海戦は起きたの	だろう？	
19		期待した賠償金が得られなかったの	だろう？	2
20		日本国民は戦争するのを嫌がらなかったの	だろう？	
21		日本はこんなに強かったの	だろう？	
22		主戦論が高まったの	だろう？	2
23		幸徳秋水・堺利彦は戦争に反対したの	だろう？	
24			だろう？	
25			だろう？	
26			だろう？	
27	いつ	日本が挑戦を植民地扱いし始めたの	だろう？	
28		戦いが始まったの	だろう？	
29		ロシアの革命運動が激しくなったの	だろう？	
30		ロシアに交渉しに行ったの	だろう？	
31		日露戦争は終わったの	だろう？	2
32		日韓議定書を調印したの	だろう？	
33			だろう？	
34			だろう？	
35			だろう？	
36			だろう？	
37			だろう？	
38			だろう？	
39			だろう？	
40			だろう？	
41	どのように	日本とロシアの戦争が始まったの	だろう？	
42		争ったの	だろう？	
43		宣戦を布告したの	だろう？	
44		ロシアに交渉したの	だろう？	
45		他の日本軍と連絡を取っていたの	だろう？	
46		日露戦争は勝ったの	だろう？	
47		漢城を占領したの	だろう？	
48		日露戦争は終結したの	だろう？	2
49		日本海海戦は戦ったの	だろう？	
50		イギリスと同盟を結んだの	だろう？	
51		ロシアは負けを認めたの	だろう？	
52		軍事上必要な土地を強制的に取り上げたの	だろう？	
53			だろう？	
54			だろう？	
55			だろう？	
56			だろう？	
57			だろう？	
58			だろう？	

59		主戦論と非戦論って		2
60		ロシアの革命運動って		
61		平民新聞って		3
62		日韓議定書って		7
63		鉄道の敷設権って		
64		利害を調整って		
65		強硬意見って	何だろう？	
66		バルチック艦隊って		
67				
68				
69				
70				
71				
72	誰が	ロシアに宣戦布告したの	だろう？	2
73		戦争をすることを決めたの	だろう？	2
74		動き出したの	だろう？	
75		日本軍をまとめていた（指揮していた）の	だろう？	3
76		バルチック艦隊を撃破したの	だろう？	
77		日露戦争の中心メンバーなの	だろう？	
78			だろう？	
79			だろう？	
80			だろう？	
81			だろう？	
82			だろう？	
83			だろう？	
84			だろう？	
85			だろう？	
86	ちなみに	国民は戦争に賛成の人が多かったの	だろう？	
87		戦いはどっちが勝ったの	だろう？	2
88		日本はロシアに勝てなかったの	だろうか？	
89		平民新聞を創刊したのに、日本から宣戦布告をしたの	だろう？	
90		日露戦争の決着はちゃんとついていないから、これからどうやって決着をつける	だろう？	
91		中国の民衆の反侵略闘争はどんなことをしたの	だろう？	
92		同盟を組んだらどうなるの	だろう？	
93			だろう？	
94			だろう？	
95			だろう？	
96			だろう？	

地歴公民科（日本史）学習指導案

島根県立松江商業高等学校
指導者氏名：坪倉　将

１．単元名　第１章　近代国家の形成と国際関係の推移　　第４節　対外関係の変化

２．実施日及びクラス
平成２８年１０月２８日（金）　１限　２年３組（男子１０名、女子１２名）

３．単元目標
①朝鮮や満州をめぐって、ヨーロッパの列強と日本との対立や協調が次第に深まっていくことを理解する。（知識・理解）
②どのような背景や論理で、日本が２つの戦争へと向かったのかを考察する。（思考・判断）
③日本がなぜ、本格的な対外戦争へと踏み切っていく過程について、意欲的に学習しようとする。（関心・意欲・態度）
④資史料や絵画などから読み取れる内容を、自分の言葉で表現することができる。
（資料活用の技能・表現）

４．指導と評価の計画

時間	内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	●条約改正	・条約改正交渉の経過について、当時の対外関係や国内情勢との関連のなかで理解する。	・条約改正交渉の経過について、当時の対外関係や国内情勢との関連のなかで理解しているか。（知識・理解）
2	●朝鮮への進出 ●日清戦争	・日清戦争の経過や結果について理解する。 ・なぜ日清戦争が起こったのかについて、日本や清、朝鮮、ロシアの立場から総合的に考察する。	・日清戦争の経過や結果について理解しているか。（知識・理解） ・なぜ日清戦争が起こったのかについて、日本や清、朝鮮、ロシアの立場から総合的に考察しているか。（思考・判断）
3	●中国分割 ●日露戦争 ●ポーツマス条約（本時）	・日露戦争の経過や結果について理解する。 ・なぜ日清戦争が起こったのかについて、日本やロシアの立場から総合的に考察する。 ・なぜ日本は賠償金を獲得できなかったのか、諸資料から総合的に考察する。	・日露戦争の経過や結果について理解しているか。（知識・理解） ・なぜ日清戦争が起こったのかについて、日本やロシアの立場から総合的に考察しているか。（思考・判断） ・なぜ日本は賠償金を獲得できなかったのか、諸資料から総合的に考察しているか。（思考・判断）
1	●韓国併合 ●満州進出	・日本の東アジアへの膨張の経過や、それに伴う対外関係の変化について理解する。	・日本の東アジアへの膨張の経過や、それに伴う対外関係の変化について理解しているか。（知識・理解）

５．学習基盤
（１）教材観
日露戦争は、日露両国のみならず、清や韓国、イギリスやアメリカといった多くの国の利害や思惑が複雑に絡み合い、第一次世界大戦にも通じる側面があったものとしてとらえさせるべきものである。また、ポーツマス講和会議については、日本が獲得した利権などを機械的に理解させてしまいがちであるが、この講和会議にも、日露両国やアメリカの国内状況や対外戦略が垣間見えて、日露戦争を複眼的にとらえさえるのに適した教材だと考える。

（２）生徒観

（３）指導観

事前に生徒から集めた日露戦争に関する疑問の中から授業テーマを決定し、ジグソー学習の方法を取り入れて行う。複数の要因が絡み合うことにより、歴史事象は生まれていくのだ、ということをしっかりと感じさせたい。

６．本時の学習指導

（１）目標

①なぜ日本は賠償金を獲得できなかったのか、日本とロシアのそれぞれの国内状況などから総合的に考察する。（思考・判断）

②諸資料から、日露両国の状況や思惑を読み取り、自分なりの言葉でまとめようとする。（技能・表現）

（２）資料

教科書『日本史Ａ』（東京書籍）、ワークシート

（３）展開

時間	学習内容	学習活動と生徒の反応	評価と教師の支援等
導入 ５分	前時までの振り返りと本時のテーマ	・本時の学習内容に対する問題意識を持つ。（関心・意欲・態度）	・発問「なぜ日本は（戦争に勝ったのに）賠償金を得られなかったのだろうか？」 ・生徒を６つのグループに分け、本時の活動ルールについて説明する。
展開１ 15分	ジグソー学習によるテーマ探究	・Ａ～Ｃ（×２）の６グループに分かれ、ポーツマス会議で行われた交渉について考察する。（知識・理解、技能・表現）	・グループごとに、以下のような資料を渡し、考察、意見交換をさせ、文章でまとめるよう指示する。 【資料】 Ａ「日露両国の余力は？」 Ｂ「ウィッテはどのような戦略を用いたか？」 Ｃ「なぜ小村は賠償金獲得をあきらめたのか？」
展開２ 25分		・異なるグループから１人ずつ集めた班を構成し、展開１において考察した内容を、他の班員に説明する。（技能・表現） ・班員の説明を聞き、日本が賠償金を得られなかった理由をまとめる。（思考・判断、技能・表現）	・各グループから１人ずつ出した３～４人からなる班を７つ作らせ、それぞれに考察した内容を他の班員に説明するよう指示する。 ・班員の説明を統合し、全体テーマに対する回答を文章でまとめるよう、指示する。 ・できるだけ箇条書きにならないよう求めるが、難しい場合には箇条書きでまとめるよう促す。 ・何人かを指名し、板書させる。
まとめ ５分	本時の内容の確認と次時の予告	・本時の感想を書く。 ・歴史を複眼的に、多角的にみることの大切さや方法について理解する。（関心・意欲・態度）	・歴史を複眼的に、多角的に見ることの大切さや面白さを述べる。

７．本時の評価

評価の観点	十分満足できると判断される生徒の具体例	おおむね満足できると判断される生徒の具体例	支援を必要とする生徒への指導の手当て
思考・判断	日本が賠償金を獲得できなかった理由について、資料の文言を自分なりに解釈し、考察している。	日本が賠償金を獲得できなかった理由について、資料をすべて用いて考察している。	発問を補ったり、資料の読み取り方への助言を行ったりして、活動に取り組みやすくする。
技能・表現	日本が賠償金を獲得できなかった理由について、諸資料の文言を分かりやすくまとめなおして、表現している。	日本が賠償金を獲得できなかった理由について、諸資料の文言を用いて、表現している。	資料の読み取りやまとめ方への助言を行ったりして、活動に取り組みやすくする。

全体テーマ　なぜ日本は賠償金を得られなかったのだろう？

A班の課題　ポーツマス講和会議が行われた時、日露両国に余力はどれくらい残っていたのだろう？

エキスパート資料A

日本軍の戦死者数は、南山会戦では約4500、遼陽会戦では約5600、旅順攻略では約14000、奉天会戦にいたっては約16000人にものぼっていた。
日露戦争が終戦したときの戦死者数を見ても、日本が約12万人、対するロシアは約11万5千人であったと言われている。

そうした事態を受けて、陸軍参謀総長・山県有朋は、伊藤博文首相や他の閣僚に、次のような上申書を出していた。「敵はなお本国に強大なる兵力を有するのに反し、我は正にあらん限りの兵力を用いつくしている」ー。

ポーツマス会議の席上で、ロシア代表ウィッテは「賠償金や領土の割譲は、完全に戦争に敗れた国のすることである。今回ロシアは国外での２～３の小戦闘で敗北しただけである。もしも日本が今後ロシアに連戦連勝し、首都サンクトペテルブルクまでも攻略できるならば、賠償金の支払いに応じることもなくはない」と、日本側に言ってのけた。

資料を読んで話し合い、A班の課題に答えてみよう。

全体テーマ　なぜ日本は賠償金を得られなかったのだろう？

B班の課題　ウィッテの外交戦略は、どのようなものだったのだろう？

エキスパート資料B

交渉相手のロシア全権は、政府の要職を歴任したセルゲイ・ウィッテである。

ニューヨークに到着したウィッテは、ユダヤ人街を訪れ、気さくに人々と語らい、少女を抱き上げる。ウィッテのこうした行動を、アメリカの記者たちは好意的に報道し、ウィッテはたちまち人気者になった。これは、アメリカのジャーナリストにユダヤ系の人々が多いことを知るウィッテの作戦だったのである。

1905年8月9日、アメリカ北東部の避暑地・ポーツマスで、いよいよ日本とロシアの講和交渉がはじまった。

翌朝、日本全権・小村寿太郎は我が目を疑った。日本が提示した講和条約の内容が、非公開を約束したはずにも関わらず、新聞に堂々と掲載されていたのである。ウィッテが、約束を破り、情報をマスコミにリークしたのだ。アメリカ世論に、日本の講和条件が過酷だという印象を与えようとするものであった。

資料を読んで話し合い、B班の課題に答えてみよう。

全体テーマ　なぜ日本は賠償金を得られなかったのだろう？

C班の課題　小村はなぜ賠償金をあきらめたのだろう？

エキスパート資料C

小村寿太郎ら日本政府は、日本国民を納得させる最低条件として、「賠償金15億円の支払い」と、「樺太の割譲」をロシアに要求することを決定し、講和会議に臨んだ。
８月９日、ついに講和会議が開始される。

8月21日、ロシアでは、皇帝ニコライ２世も出席した会議が招集された。皇帝ニコライ２世の結論は、「我がロシアは、一握りの土地も、１ルーブルの金も、日本には与えない」であった。

８月２６日、賠償金にこだわる日本への国際社会の批判は、日増しに強まっていった。小村は、ついに賠償金獲得を断念。樺太の南半分の獲得に最後の期待をかけて交渉を再開した。しかし、ウィッテの答えが小村を打ちのめした。「我がロシア帝国は、領土割譲・賠償金支払い、いずれにも一切応じられない」ー。賠償金はおろか、領土さえもまったく取れないのかー。

しかし、アメリカの働きかけにより、ニコライ２世は考えを改める。
８月２９日、交渉の最終日。
小村は「樺太南部を日本領とすることを条件に、賠償金支払い要求を撤回する」と述べた。
ウィッテは答えた。「わがロシア帝国は、日本への南樺太割譲を受諾する」。

資料を読んで話し合い、Ｃ班の課題に答えてみよう。

地歴公民科（日本史）学習指導案

島根県立松江商業高等学校
指導者氏名：坪倉　将

１．単元名　第１章　近代国家の形成と国際関係の推移　　第４節　第一次世界大戦と日本

２．実施日及びクラス
平成２８年１２月１６日（金）　４限　２年２組（男子８名、女子１４名）

３．単元目標
①欧米諸国の帝国主義政策が拡大し、第一次世界大戦の勃発に至る経過を理解する。（知識・理解）
②日本も含め、列強諸国が帝国主義政策が拡大していった背景について、多角的に考察する。（思考・判断・表現）
③第一次世界大戦が国際社会や日本にもたらした影響について、意欲的に学習しようとする。（関心・意欲・態度）
④資史料や絵画などから読み取れる内容を、自分の言葉で表現することができる。（資料活用の技能）

指導と評価の計画

時間	内容	学習活動	評価規準（評価方法）
4	●欧米諸国の帝国主義① ●　〃　②（本時） ●第一次世界大戦と日本	・第一次世界大戦が勃発した背景として、列強諸国の帝国主義の高まりについて、諸資料から考察する。 ・風刺画や諸資料から、帝国主義の高まりについて多角的に考察し、自分の言葉で分かりやすくまとめる。	・なぜ第一次世界大戦のような多国間戦争が勃発したのか、その背景を意欲的に探ろうとしているか。（関心・意欲・態度） ・風刺画や諸資料から、帝国主義の高まりについて多角的に考察し、自分の言葉で分かりやすくまとめられているか。（思考・判断・表現、資料活用の技能）
1	●民族運動の高まり	・アジアで、反日運動が高まったことを理解する。	・アジアでの反日運動の高まりについて理解しているか。（知識・理解）
1	●国際協調外交	・大戦後、日本を含む列強諸国が軍縮、国際協調に向かったことを理解する。	・大戦後、日本を含む列強諸国が軍縮、国際協調に向かったことを理解する。（知識・理解）
2	●大戦期の国内政治	・第一次世界大戦が日本の政治、経済、社会にどのような影響を与えたのかを、諸資料から考察する。	・第一次世界大戦が日本の政治、経済、社会にどのような影響を与えたのかを、諸資料から考察する。（思考・判断・表現、資料活用の技能）

５．学習基盤
（１）教材観
20 世紀は「戦争の世紀」とも言われる。そのなかで第一次世界大戦は、かつてないほどの大規模な多国間戦争として、また「総力戦」の様相を呈した戦争として、先駆けとなるものである。
日本は、その第一次世界大戦によって中国などでの利権を拡大したうえに、日露戦争前後からの経済的苦境をも改善するため、この戦争が日本にとって「天佑」であったとして生徒にとらえさせることが多い。しかし、従来の日本史の授業展開のなかでは、そもそもなぜ、この時期にかつてない大規模な多国間戦争が起こったのかといったことをあまり考えさせることなく、上記のような理解をさせてしまいがちであった。
欧米諸国の帝国主義の高まりについて理解を深めることは、第一次世界大戦そのものへの理解を深めることはもちろん、日本がこの後、対外侵略を強め、度重なる戦争を経験していく理由への探求にもつながるはずである。

（２）生徒観

（３）指導観

教師の問いかけに対する、前時の生徒たちの応答に対して、さらに疑義を呈することによって生徒の思考の深まりを導きたい。ジグソー法を採用することによって、やや発展的な内容に対する生徒の抵抗感を減らしたい。本時のまとめでは、前時からの生徒の変容をしっかりと評価するとともに、「近代の日本はなぜ戦争ばかりしたのか」という、生徒の根本的な問いに対する応答にもなるように意識する。

６．本時の学習指導

（１）目標

①日本も含め、列強諸国が帝国主義政策が拡大していった背景について、多角的に考察する。（思考・判断・表現）

②諸資料や絵画などから、この時代の帝国主義について考察し、自分なりの言葉でまとめようとする。（資料活用の技能）

（２）資料

教科書『日本史Ａ』（東京書籍）、ワークシート、パワーポイント

（３）展開

時間	学習内容	学習活動と生徒の反応	評価と教師の支援等
導入 ５分	前時までの振り返りと本時のテーマ	・本時の学習内容に対する問題意識を持つ。（関心・意欲・態度）	・パワーポイントを用いながら、前時の生徒の応答に疑義（「巨大独占企業は何を求めてる？」「政治家は何を考えている？」「政治家との関係は？」）を呈し、風刺画の読み解きをさらに深めることを求める。
展開１ 10分	ジグソー学習によるテーマ探究	・Ａ～Ｃ（×２）の６グループに分かれ、19 世紀末の帝国主義政策の高まりの背景について考察する。 （思考・判断・表現、資料活用の技能）	・グループごとに、以下のような資料を渡し、考察、意見交換をさせ、文章でまとめるよう指示する。 【資料】 Ａ「巨大独占企業は、どのように生まれたのだろうか？」 Ｂ「巨大独占企業は、政治家に何を、どのような理由で求めていたのだろうか？」 Ｃ「当時の政治家たちは、どのようなことを考えていたのだろうか？」
展開２ 20分		・異なるグループから１人ずつ集めた班を構成し、展開１において考察した内容を、他の班員に説明する。（思考・判断・表現） ・班員の説明を聞き、風刺画が描いている状況を文章で説明する（思考・判断・表現）	・各グループから１人ずつ出した３～４人からなる班を７つ作らせ、それぞれに考察した内容を他の班員に説明するよう指示する。 ・班員の説明を統合し、全体テーマに対する回答を文章でまとめるよう、指示する。 ・できるだけ箇条書きにならないよう求めるが、難しい場合には箇条書きでまとめるよう促す。 ・何人かのまとめを教員のＰＣに打ち込む。
まとめ 10分	本時の内容の確認と次時の予告	・第一次世界大戦の勃発や、日本の対外侵略の強化の背景を理解する。（知識・理解） ・本時の感想を書く。	・ＰＣを用いながら、生徒のまとめを共有する。 ・19 世紀末から、欧米諸国ではこのようにして帝国主義政策が高まっていったことを理解させる。そしてその結果、人類史上最大の多国間戦争としての第一次世界大戦が勃発すること、日本も同様にして数多くの戦争を経験していくことを理解させる。

７．本時の評価

評価の観点	十分満足できると判断される生徒の具体例	おおむね満足できると判断される生徒の具体例	支援を必要とする生徒への指導の手当て
思考・判断・表現	風刺画が示している帝国主義の高まりについて、資料の文言を用いて自分なりに解釈し、考察している。	風刺画が示している帝国主義の高まりについて、資料をすべて用いて考察している。	発問を補ったり、資料の読み取り方への助言を行ったりして、活動に取り組みやすくする。
資料活用の技能	風刺画が示している帝国主義の高まりについて、諸資料の文言を分かりやすくまとめなおして、表現している。	風刺画が示している帝国主義の高まりについて、諸資料の文言を用いて、表現している。	資料の読み取りやまとめ方への助言を行ったりして、活動に取り組みやすくする。

全体テーマ　この風刺画は、どのような状況を描いているのだろう？

A班の課題　独占企業はどのように生まれたのだろうか？

エキスパート資料A

19世紀末、欧米諸国では鉄鋼・機械・化学などの重工業が発達し、第2次（　　）が起こった。この結果、工場の規模は以前とは比べられないほど巨大になり、工業生産力が急速に高まった。

しかし、生産力が急速に高まったために、各国では過剰生産となって（（　　）が出始め）、各企業は生産を（　　）ようになっていった。その結果、景気が（　　）なっていき、19世紀末には史上初めての恐慌（ひどい不景気）が発生した。

恐慌が起こると、企業の経営は悪化するので（　　）企業は倒産して、ごく少数の（　　）企業だけが生き延びる、という結果になる。こうして、生き延びたごくわずかの企業が、市場を（　　）するようになった。

空欄に言葉を入れて、A班の課題に答えてみよう。

全体テーマ　この風刺画は、どのような状況を描いているのだろう？

B班の課題

独占企業は、政治に何を、どのような理由で求めていたのだろう？

エキスパート資料B

欧米諸国は、ずっと以前から植民地獲得競争をしてきた。それは、植民地で原料や資源を安く手に入れて、さらに作った製品を買わせるためであった。

しかし、19世紀末になると、それらに加えて、国外投資で利益を挙げることが重要になってきたのである。国外投資とは、たとえば資本（お金）の足りない地域に資本を貸して、高い利息を受け取ったり、国外に鉄道を建設したり工場建設などを行って、利益を得ることである。

この時代には、欧米諸国は景気が悪く、国内で資本を使っても利益が上がらなくなっており、資本家たちは「国内がだめなら国外で！」とばかりに、政府の軍事力と結びついて植民地の獲得に走ったのである。

資料を読んで話し合い、B班の課題に答えてみよう。

全体テーマ　この風刺画は、どのような状況を描いているのだろう？

C班の課題

当時の政治家たちは、どのようなことを考えていたのだろう？

エキスパート資料C

19世紀末の欧米諸国の労働者たちは、当時恐慌（ひどい不景気）などで生活苦に陥り、不満を強めいていた。しかも彼らは、この時代には参政権を得ていたので、そうした労働者たちの不満を和らげなければ、政治家たちは次の選挙で落選するかもしれない。

そこで政治家たち（政府）は、海外の植民地から得た利益の一部を使い、社会政策（保険・年金制度の制定、初等教育の無償化など）を充実させて、労働者の不満を和らげようとした。つまり、植民地の人々の犠牲によって、国内政治の安定を図ったわけである。

資料を読んで話し合い、C班の課題に答えてみよう。

この絵は、どのような状況を風刺しているのだろう？

・圧力をかけている
・話し合っている

【解答1】

【解答2】

【解答3】

【解答例】
19世紀末頃から、欧米諸国では第2次産業革命が起こり、巨大な独占企業が生まれた。そうした企業の資本家たちは、国外投資のために植民地を求めるようになり、政治にその実現を期待するようになった。
一方の政治家たちも、植民地から得た利益で、社会政策を充実させて国民の支持を得るために、対外侵略政策を強めた。
風刺画は、このような19世紀末ごろからの政治状況を風刺している。

20世紀は、「戦争の世紀」

1894　日清戦争
1904　日露戦争
1914　第一次世界大戦
1931　満州事変
1937　日中戦争
1941　アジア・太平洋戦争

なぜ明治時代以降の日本は戦争ばかりしたの？？

【解答例】
19世紀末頃から、欧米諸国では第2次産業革命が起こり、巨大な独占企業が生まれた。そうした企業の資本家たちは、国外投資のために植民地を求めるようになり、政治にその実現を期待するようになった。
一方の政治家たちも、植民地から得た利益で、社会政策を充実させて国民の支持を得るために、対外侵略政策を強めた。

地歴公民科（日本史）学習指導案

島根県立松江商業高等学校
指導者氏名：坪倉　将

１．単元名　第２章　近代産業の発展と両大戦をめぐる国際情勢　　第４節　第二次世界大戦と日本

２．実施日及びクラス
平成２９年３月１０日（金）　１限　２年３組（男子１０名、女子１２名）

３．単元目標
①国内・国際情勢との関連のなかで、第二次世界大戦へと至る経過を理解する。（知識・理解）
②日本が相次ぐ戦争へと進んでいった要因について、多角的に考察する。（思考・判断・表現）
③相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを知ろうとする。（関心・意欲・態度）
④資史料から読み取れる内容を、自分の言葉で表現することができる。（資料活用の技能）

４．指導と評価の計画

時間	内容	学習活動	評価規準（評価方法）
8	●中国との長い戦争が始まった ●戦争の影が文化に及ぶ ●すべてが戦争に協力させられた ●アメリカとの戦争がはじまった ●戦争と国民（テーマ学習、本時） ●アジア・太平洋の諸民族にかかわった ●生活も戦争に染まった ●戦争が終わった	・国内・国際情勢との関連のなかで、第二次世界大戦へと至る経過を理解する。 ・日本が相次ぐ戦争へと進んでいった要因について、多角的に考察する。 ・相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを知る。 ・資史料から読み取れる内容を、自分の言葉で表現する。	・国内・国際情勢との関連のなかで、第二次世界大戦へと至る経過を理解できたか。（知識・理解） ・日本が相次ぐ戦争へと進んでいった要因について、多角的に考察できたか。（施行・判断・表現）） ・相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを知ろうとしたか。（関心・意欲・態度） ・資史料から読み取れる内容を、自分の言葉で表現することができたか。（資料活用の技能）

５．学習基盤
（１）教材観
日中戦争が泥沼化するなかで、やがて日本は欧米諸国との対立も深めていく。物的・人的資源が不足ていくにともなって、日本国内でも多くの人々が戦争に巻き込まれていくこととなった。ただし、そうした人々を戦争の「被害者」として一面的にとらえるのでなく、長期にわたる戦争を支え、結果的に「協力」していく人々としての姿をも学ぶことで、昭和期の日本が相次いで戦争へと突き進んでいった要因が見えてくる。

（２）生徒観

（３）指導観
大変明るく、元気のいいクラスであり、意見を述べることや話し合い活動などにも積極的に臨む生徒が多い。しかし今回は、あえて１人１人にじっくり考え、表現させることに重点を置いて、生徒個々の内面での思考の深まりを促したい。

6．本時の学習指導

（1）目標

①相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを知ろうとし、考察しようとする。（関心・意欲・態度、思考・判断・表現）

（2）資料

教科書『日本史A』（東京書籍）、ワークシート

（3）展開

時間	学習内容	学習活動と生徒の反応	評価と教師の支援等
導入 15分	本時のテーマ	・本時の学習内容に対する問題意識を持つ。（関心・意欲・態度） ・戦争に行くことを「喜び」としてとらえた人々がいたことも知り、その理由について関心を持つ。	・特攻隊として戦死した若者の手紙や、教科書の従軍体験記のコラムを通して、戦争の悲惨さや、それに巻き込まれた人々の悲しみを想像させる。 ・朝日新聞の調査記事を示し、生徒に揺さぶりをかける。そこから、「日本はなぜあれほど多くの戦争を行ったのか」について考察することが本時のテーマであることを示す。
展開 25分	戦争に動員された人々の気持ちを読み解く	・諸資料から、さまざまな立場で戦争に関わった人々が、どのように戦争を受け止めていたのかを考察する。（思考・判断・表現、関心・意欲・態度）	・諸資料を読み解き、人々が戦争をどのように受け止めていたのかを、自分なりの言葉で表現させる。
まとめ 10分	本時の内容の確認	・本時の感想を書く。	・当時の人々の戦争の受け止め方への感想とともに、「日本はなぜあれほど多くの戦争を行ったのか」、についても自分なりに表現するよう促す。

7．本時の評価

評価の観点	十分満足できると判断される生徒の具体例	おおむね満足できると判断される生徒の具体例	支援を必要とする生徒への指導の手当て
思考・判断・表現 関心・意欲・態度	相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを意欲的に知ろうとし、考察した内容を的確に分かりやすく表現している。	相次ぐ戦争を、日本の国民がどのように受け止めていたのかを知ろうとし、考察した内容を自分なりの言葉で表現している。	資料の読み取りへの助言を通して、活動に取り組みやすくする。

【資料①】

兵舎に着いたのは、十二月二日の午後だった。土屋芳雄の初年兵としてのスタートである。二十歳だった。ところが、どうだ。新兵たちの世話をする古兵たちのやさしく、親切なこと。それに、支給される品々の多さ。わが身の過去を振り返ると、徴兵検査の日に、着物を新調したのが初めての晴れ着ではなかったか。それが、菊の御紋章入りの三八式兵銃をはじめ、衣類から靴、帽子、外套など、「自分の物はふんどしだけでいい」ぐらい支給された。…私物は、例外を除いて規則で持ち込めなかったが、貧乏新兵土屋には不自由さよりも豊かさの感じが強かった。…「 宣誓式」のような儀式は、特になかった、と思う。覚えているのは、夕食の豪華さだ。飯はムギメシだったが、ワラジのようなビフテキが出た。あんな大きな肉なら、西郷村の土屋家なら五人分以上の量だ。もちろん、ビフテキなど食べたことはない。それに、肉などが入った栄養たっぷりの汁。あとは、タクアンとウメボシくらいだったが、土屋には目を見張るごちそうだった。

（朝日新聞山形支局『聞き書き　ある憲兵の記録』　）

【資料②】

いろり端での軍隊話からまず、いくつか拾ってみます。「 軍隊ず所ァいいもんでがんした。明るくなるまで寝せておいてくれて、暗ぐなれば、寝ろって寝せでくれだ」「 米のメシを食せでけるっけァ、いい所だった」「 洋服着せで皮の靴はがせでくれだったス」「 大学出たのもいたが、よくなぐられているもんだったス」「 大学出もおらも同じになぐってくれるっけス」「 大学生が初年兵で入ってきたっけが、生意気だから、ぶんなぐってやったっけが、おもしぇがんしたなァ」「 おらはァ、軍隊のおかげで字ッコを覚え、手紙ッコも書けるようになりあんした」「 あそごのオンジは棄げオンジ（不要な二、三男）なんて言われたもんだっけが、軍隊にいって伍長になって来てス、それがら青年訓練所の指導員なんかやって、今では村会議員でがんす」

（大牟羅良『ものいわぬ農民』から）

【資料③】

今日婦人が分担せる任務で国家的に重要なるものはあるが、その第一は、国家の単位であり、国民生活の本拠である家庭を主宰し、子女の育成に任ずるとともに、家庭の消費経済を司り、家庭の保健に努むる事等々—すなわち主婦としての任務である。

この婦人の任務は、…私どもの見るところでは、今日まで「良妻賢母」なる狭隘なる言葉によって代表され、家庭は城郭をなして国家社会から全く分離されてきた憾み（感じ）が多分にあるのである。

しかし、支那事変の勃発後においては、国家の要請に伴い、…国家の一細胞たらざるを得なくなったのである。家庭の主婦もまた、家庭内の一私人から国民として軍事援護等の諸活動に動員されるに至ったのであった。　（市川房枝「新政治体制と婦人組織」『女性展望』1940年9月号）

【資料④】

か弱い乙女としか見えなかった娘たちが、きりゝと引き締まった物腰で夜遅くまで働いて、疲れた色もなく明日もまた、朝早くから出勤するのです。「休みどころでないのよ、お母さん、私なんか、三人分働かなければおっつかないのさ」と言われて、お母さんは、娘のかいがいしさに呆気に取られてしまう、とこぼしますが、娘たちは非常時意識を満喫してピチピチ働いているのです。忙しければ忙しいほど、そして重要な事務を委託されてはいっそう精一杯に働こうという楽しい張り合いがわいてくるのです。

（奥むめお「非常時に婦人の力を試さん」『婦人運動』1937年9月号）

ワークシート

Ｑ１．なぜ近代日本は、あれほど多くの戦争をしたのだろうか？
そして、その「責任」は誰にあるだろうか？
※今年1年の勉強を振り返って、自分なりの言葉でまとめてみよう。

Ｑ２．当時の国民たちは、戦争をどのようにとらえていただろうか？

Ｑ３．資料①、②を読むと、戦争に行くこと（兵士になること）を、国民たちはどのようにとらえていたことがわかるだろうか？

Ｑ４．資料③、④を読むと、女性たちは、戦争をどのようにとらえていたことがわかるだろうか？

Ｑ５．今日の授業を終えるにあたって、改めて聞きます。
なぜ近代日本は、あれほど多くの戦争をしたのだろうか？
そして、その「責任」は誰にあるだろうか？

2年　　組　　番　　名前（　　）